

日本オセアニア学会関西地区例会開催のお知らせ

テーマ：「オセアニアと日本の戦後」

【日時】 2016年1月23日（土）13:00～17:00

【場所】 京都大学吉田南キャンパス 総合人間学部棟 1207 教室

(http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/yoshida/map6r_ys.html)

【プログラム】

13:00～14:00 発表1：深田淳太郎（三重大学人文学部）

「遺骨収集の終わり方：ガダルカナル島の遺骨収容活動における遺／残された骨をめぐって（仮）」

休憩（15分）

14:15～15:15 発表2：新井隆（一橋大学大学院社会学研究科博士課程・学振特別研究員（DC2））

「グアムにおける戦争の記憶の「もつれ」—記念・顕彰と追悼・慰霊のはざままで（仮）」

休憩（15分）

15:30～15:50 コメント1：飯高伸五（高知県立大学文化学部）

15:50～16:10 コメント2：粟津賢太（南山大学宗教文化研究所）

16:10～17:00 全体討論

終了後、百万遍付近で懇親会を開催いたします。



※市バス「京大正門前」へは下記のバスが便利です。

・JR 京都駅 …206 系統「東山通 北大路バスターミナル」行

・阪急河原町駅 …201 系統「祇園・百万遍」行

(いずれも循環系統ですので、逆回りにご乗車にならないよう、ご注意ください。)

※吉田南キャンパスへは市バス「京大正門前」下車後、東一条交差点を東(吉田神社方面)にお進みください。

※右手の門(時計台とは反対側)から入ってすぐ、左図 79 番の建物が研究会場です。

※建物へは北側(道路に面した側)のドアからお入りください。

目の前の階段を 2 階へ上がると 1207 教室があります。

※京阪「出町柳駅」から研究会場へは徒歩約 20 分、市バス「百万遍」からは徒歩約 10 分です。

(発表概要)

遺骨収集の終わり方: ガダルカナル島の遺骨収容活動における遺／残された骨をめぐって(仮)

深田 淳太郎

三重大学人文学部

第二次大戦において海外で戦没した日本人は 240 万人にのぼる。戦後、実施された遺骨収容事業によって帰還したのは、2013 年時点でおおよそ半分の 127 万柱で、のこりの 113 万柱は海外にのこされたままである。

遺骨収集活動が目指すところは、端的に言えば、この残された遺骨を 0 にすることであるが、しかしそれは不可能である。すでに戦後 70 年が経過し、特に太平洋、東南アジアなどの熱帯地域における遺骨はすでに土に還ってしまったものも少なくないため、どうやってもすべて収容することはできない。では、いったい、いつ、どうすれば遺骨収集は「終わる」のだろうか。この問題について、遺骨と残骨という二つの「のこされた骨」をキーワードに考察してみたい。

ここで「遺骨」とは、骨と「それを遺された人々」の関係としてこの問題を捉える語である。この観点からすれば、遺骨は、それを遺された遺族・戦友がいなくなれば風化し、「終わる」ものである。だが、この風化の際で、政府は近年遺骨収集事業を活性化させている。平成 27 年には「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律」が制定され、同年以降の 10 箇年に集中して事業を推進する方針を定めた。ここには遺骨問題を風化させまいという意志と、同時に 10 年で（遺族・戦友が存命の間に）「終わり」にしたいという意図の両方が看取できる。しかし、この活動は同時に新たな世代の間に自らを「遺された人＝国民」と考え、遺骨収容に携わる人々を生み出してもいる。「遺された人」がいれば、遺骨は新たな形で存在するようになるのだろうか。

もう一つの「残骨」は、遺骨の収容活動において、その場所で「収容しきれずに残ってしまう」骨を指す語である。すでに遺骨が土に還りはじめているため、すべては取り切れず、どうしても細かい「骨片」は残り続ける。この「残骨」は収容者たちを迷わせる。すべて持ち帰りたいが、ここを「終わり」にしなければ他の場所の遺骨収容に向かえない。実際の収容現場において人々は、この「とり終われない残骨」とどのように向き合うのか。

以上の二つの「のこされた骨」をめぐら問題について、ガダルカナル島で実施されている遺骨収容活動を事例に考え、その上で遺骨収容を「終わる」ということがいったい何を意味するのか、それがいかにして可能になり得るのかについて考察してみたい。

(発表概要)

グアムにおける戦争の記憶の「もつれ」—記念・顕彰と追悼・慰霊のはざままで (仮)

新井 隆

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 (DC2)

アジア・太平洋戦争においては、1941年12月から1944年7月まで日本軍がグアムを占領統治していた。特にその末期、アメリカ軍の再上陸が間近に迫ると、男性は飛行場建設や陣地構築に駆り出され、女性や子どもは食糧増産に動員された。グアムでは毎年7月になると、日本による占領統治や日米両軍の激戦の中で惨禍を被ったり、亡くなったりしたチャモロの追悼や記念の諸行事が行われている。特に、7月21日はアメリカ軍が日本の占領統治からグアムを「解放」したことを記念して、「解放」記念日 (Liberation Day) という祝日が設けられている。同日は、グアムの中心都市であるハガニヤで盛大なパレードが催され、様々な団体の山車 (float) や人々が目抜き通りを練り歩くとともに、数万人の観客がこの式典に集う。また同じ時期には、地元コミュニティや記念財団等が主催する追悼行事も島内各地で行われており、日本占領統治期を生き抜いたチャモロの人々やグアム政府・議会関係者、米軍関係者など様々な人々が参加する。

つまり、同島の人々にとって毎年7月は、約70年前の日米による戦争で受けた苦難を想起し、犠牲者を悼むための大事な1ヶ月であるということができる。本報告では、これらグアムにおける戦争の記憶の表象に焦点を当てながら、そこに立ち現れる記念・顕彰と追悼・慰霊をめぐる「ねじれ」について考察する。具体的には、毎年7月に行われる「解放」(Liberation)の諸行事と島内各地の追悼式・慰霊祭を取り上げながら、式典の歴史的背景や主催者、参加者の中身に注目する。各行事の成り立ちや関わりのある人々に目を向けることで、記念・顕彰と追悼・慰霊の「ねじれ」にグアム・日本・アメリカという三者関係が深く影響を及ぼしていることを確認したい。